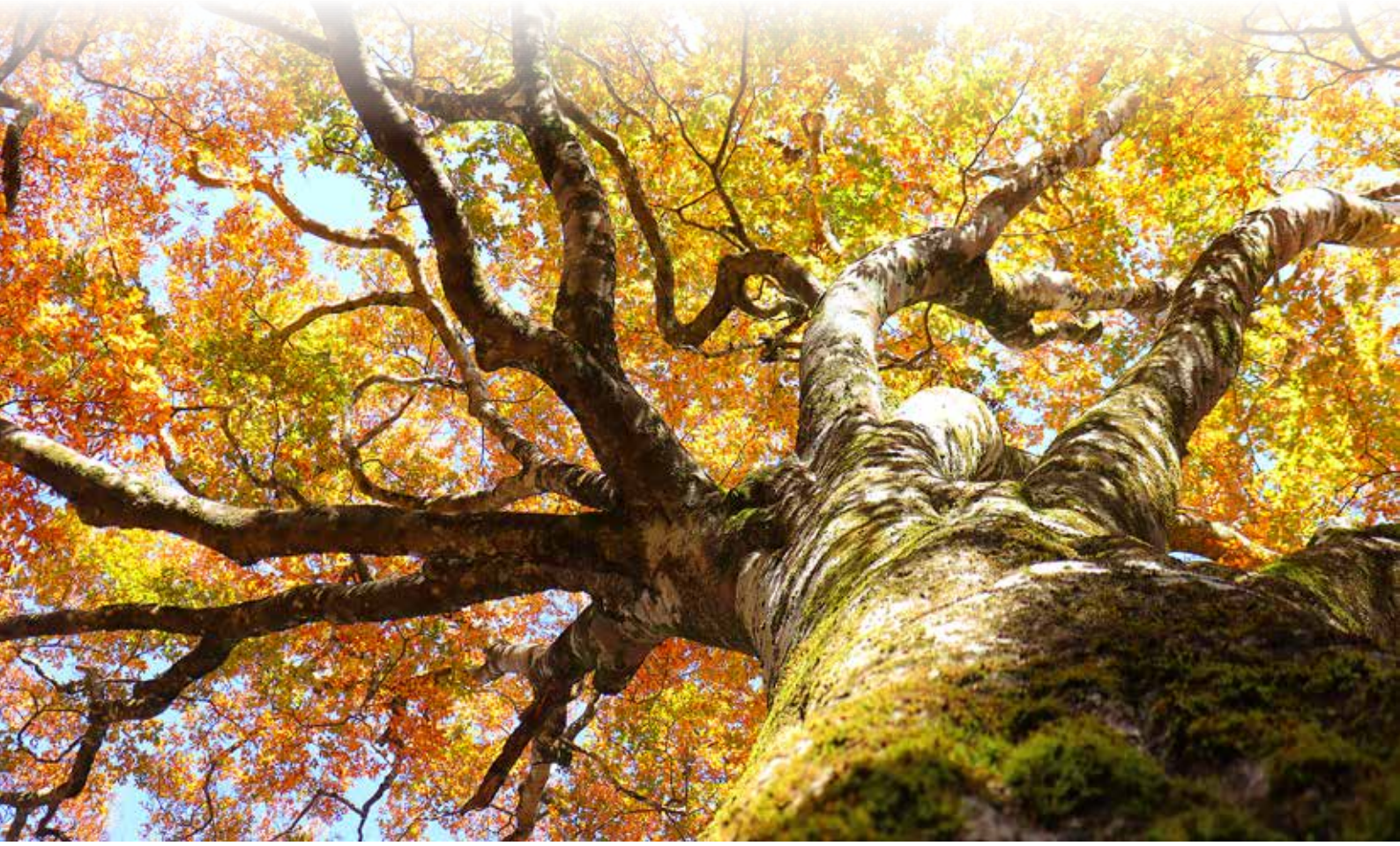
クリーン四国

No.1280
2026年
11月号

国家公務員健康週間の取組について

【詳細は3頁】



四国の山　写真動画コンテスト「四国の山々の風景」 入選「黄金色の森」

目次

令和8年度森林総合監理士等意見交換会を開催〈局〉 …… 2
国家公務員健康週間の取組について〈局〉 …… 3
もくもくエコランド2026 第9回森林環境学習フェアに参加〈局〉 …… 4
嶺北地区増産・再造林推進協議会で「ノウサギ研究アーカイブ」勉強会を開催〈技術センター〉 5
2026年ウッディフェスティバルに参加〈香川所〉 …… 6
労働災害の防止に向けて連絡協議会を開催〈嶺北署・高知中部署〉 …… 7
「高知の自然！大発見すごろく」を用いた森林教室を開催〈嶺北署〉 …… 8
林道維持の現場ＯＪＴを実施〈嶺北署〉 …… 9
災害に備えた講習等を実施〈高知中部署〉 …… 9
白髪山の山頂標識を交換〈高知中部署〉 …… 10
「こうち木育ひろばinしまんとぴあ」に出展しました！〈四万十署〉 …… 11
第54回久万林業まつりに参加〈愛媛署〉 …… 12
天空の笹原「土佐矢筈山」周辺で山歩きイベント開催〈高知中部署〉 …… 13
「みやびの森」秋のボランティア活動開催〈高知中部署〉 …… 14
大豊学園で治山事業を学ぶ環境学習教育を実施〈嶺北署〉 …… 15
津野町内の2小学校合同で木工教室を開催〈ふれあいセンター〉 …… 16
業務研修を受講して（基礎C_森林の収穫〈徳島署〉） …… 17
防護柵の設置と管理をより効率的におこなうためには？〈森林総合研究所四国支所〉 … 18

四国山の日

四国森林管理局

高知市丸ノ内１丁目３－30
ＴＥＬ 088－821－2052
Ｈ　Ｐ https://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/
E-mail shikoku_soumu@maff.go.jp

令和８年度森林総合監理士等意見交換会を開催

〈局 技術普及課〉

10月14日、四国森林管理局において「令和８年度森林総合監理士等意見交換会」を開催しました。

本意見交換会は、四国４県と四国森林管理局・森林管理署等の森林総合監理士等が情報共有や意見交換を行い、相互の連携強化や市町村への効果的な支援方策について検討することを目的として、毎年開催しているものです。

今年度は、参加者、参加機関の技術・知識の向上も念頭に「QGISの活用」をテーマとして設定し、当日は、各機関の森林総合監理士や民有林・国有林連携担当者のほか、森林管理署からの聴講参加者を含む計31名が出席しました。

はじめに、四国４県と四国森林管理局におけるQGISや森林クラウドの活用事例についての情報共有を行いました。各機関からは、QGISの普及に向けた取組や航空レーザ計測データを活用した森林資源情報の解析、県独自の森林クラウドの運用事例などが紹介されました。

質疑応答では、職員への教育体制やデジタル化に伴う業務負担への対応、航空レーザ計測データによる森林資源情報の解析結果と森林簿データとの違いなどについて、活発な意見交換が行われました。

続いて、一般財団法人日本森林林業振興会四国支部の高野一隆森林調査主任を講師として、森林区域のゾーニングや地形把握、樹頂点の抽出による本数密度分析など業務に活用できる事例についての講義を行いました。

講義後には、QGISの各種機能やオルソ画像作成時のドローン撮影方法などについて、出席者から多くの質問が寄せられました。



意見交換会の様子

また、近年、ノウサギによる森林被害が地域における課題となっていることから、森林技術・支援センターが公表した「ノウサギ研究アーカイブ」に基づいて、これまでのノウサギに関する研究の経緯や防護ネット被害の発生メカニズムなどについて、同センターの渡辺副所長から説明を行いました。



渡辺副所長からの説明の様子

その後、防護ネットの種類や管理方法に加え、資材の運搬が困難な造林地における設置の要否判断などについて質疑応答があり、終了後も意見交換が行われるなど、出席者の関心の高さがうかがえました。



意見交換会終了後の様子

当局では、市町村支援の推進を念頭に、今後も四国４県と連携しながら、森林総合監理士等の知識・技術の向上や情報共有の充実を図ってまいります。

国家公務員健康週間の取組について

〈局 総務課〉

10月1日から7日までの一週間、四国森林管理局において、「笑顔と会話が心のサプリ　声を交わして元気な職場」をスローガンに、令和８年度国家公務員健康週間が実施されました。

健康週間は職員の健康の保持増進に対する認識を新たにし、一層の取組を推進することによって、公務能率の向上に資するために毎年実施されているものです。この間、局・署(所)においては、健康の保持増進に係る意識の高揚と健康管理の重要性の普及に努めること、職業性疾病の予防や心身両面にわたる健康管理に対する取組を行うこと、衛生講話や救急連絡体制の確認などを行うことが計画され、健康週間にふさわしい取組が行われました。



林野庁ポスター

【健康週間に実施する事項】

一　安全衛生旗又は衛生旗を掲揚するとともに、広報誌等を活用した啓発活動を行い、健康の保持増進に係る意識の高揚と健康管理の重要性の普及に努める。

二　森林管理署長等、健康管理者による現場巡視を実施し、職業性疾病の予防及び心身両面にわたる健康管理意識の高揚を図る。

三　健康管理医等による健康管理、心の健康づくり等に関する講話の実施等、健康週間にふさわしい取組を行う。

本局では、健康週間初日の10月１日に、総務企画部長と総務課長による安全衛生旗の掲揚を行いました。



安全衛生旗の掲揚（局庁舎屋上にて）

５日午後からは局大会議室において健康大会を開催し、健康管理医であるアズマ耳鼻咽喉科・アレルギー科の東祐史院長から「山仕事の安全と救急対応～命を守るファーストエイドと蜂・アナフィラキシー対策」と題して健康講話があり、林業は全産業平均と比較して死亡・重症リスクが非常に高い現場であるため、「すぐに救急車が来ない山中」での安全確保と仲間による救命の重要性や、山の現場で起こる可能性が高いハチ刺傷によるアナフィラキシーショックへの対応などについてご説明いただき、幹部職員を含め84名の職員が熱心に耳を傾けました。



質疑応答の様子

健康週間を契機に、心の健康を含め健康の重要性を改めて認識し、健康診断の結果、指導区分を受けている職員は、健康管理医の指導等に基づき、生活習慣の改善等に取り組むなど、職員一人ひとりが今後も健康の保持増進や自主的な健康管理に努めていきます。

もくもくエコランド2026 第９回森林環境学習フェアに参加

〈局 技術普及課〉

10月17、18日の２日間、「もくもくエコランド2026　第９回森林環境学習フェア」が高知市の東洋電化中央公園で開催されました。本フェアは、高知県の森林環境税を活用して、子どもから大人まで楽しみながら、森林の役割や大切さ、木材利用について学べるイベントとして毎年開催されています。

初日のオープニングセレモニーでは、主催者、高知県高知市の来賓祝辞の後、当局近藤森林整備部長が森林の多面的機能の大切さについて触れながら祝辞を述べました。

続いて、テープカットの代わりに来賓者が丸太を切り落とす「丸太カット」が行われました。力のいるのこぎり挽きですが、次々に切られていき、最後まで残った2026ミス日本緑の大使の永田さんにはたくさんの声援が送られ、参加者の一体感も高まり、大きな拍手が寄せられました。



丸太カットの様子

四国森林管理局のブースでは、子供たちに森林の水源涵養機能や水質浄化機能を体験してもらう「土壌浸透実験」を行いました。木のある山と、木のない山の模型に、実際の土壌を表した土をセットしてジョウロで雨水に見立てた水を流し、その水の行方や色の違い、山の斜面の土の状態などを比較します。園児から小学生の子どもたち、保護者など大人の方々も参加し、積極的に水を流したり、歓声を上げたりして盛り上げてくれました。



土壌浸透実験の様子

子どもたちは、木のある山では地表を流れる水より地下水になる水が多く、更に最初に出てきた水よりも最後に出てきた水の方が透明になっていることに驚いていました。「森林の土に含まれる空気の層を水が通る間に、だんだんと汚れを落としていくんだよ」という説明に、「そういうことか！」との反応が見られ、森林の持っている大切な役割を伝えられて嬉しく思いました。

また、今年度は秋の緑の募金街頭活動も本イベントと同時に行われ、2026ミス日本緑の大使や緑の少年団の皆さんが中央公園北口にて、募金への協力を呼びかけました。

２日間、ステージでもトークショーや森林のお仕事体験、魚梁瀬杉のヴァイオリンの演奏会などが行われ、盛り上がりを見せていました。

これからも森林の大切さを伝える活動に取り組んでまいります。



緑の募金街頭活動の様子

嶺北地区増産・再造林推進協議会で「ノウサギ研究アーカイブ」勉強会を開催

〈森林技術・支援センター〉

10月20日、嶺北地区増産・再造林推進協議会によるノウサギ対策勉強会が、嶺北森林管理署管内の石原山国有林で開催されました。当日は、高知県や市町村、森林組合、林業事業体などから26名が参加し、当局森林技術・支援センター（以下「技術センター」という。）が公開している「ノウサギ研究アーカイブ」について説明し、現地を見ながらノウサギ被害の実態や対策について理解を深めました。

嶺北地区増産・再造林推進協議会は、木材の安定供給と森林資源の循環利用を図るため、増産及び伐採跡地の再造林を推進することを目的としており、林業事務所、市町村、森林組合、林業事業体、林業用苗木生産者などの関係者により組織されています。今回の勉強会は、嶺北林業振興事務所からの呼びかけにより、再造林地で被害が拡大しているノウサギへの対策を学ぶことを目的として開催されたものです。

勉強会の冒頭では、嶺北林業振興事務所の森本所長が、「近年、狩猟者の減少や再造林面積の拡大などによりノウサギ被害が増加傾向にある。本日の勉強会を通じてノウサギ対策の知見を深め、今後の取組に生かしてほしい」と挨拶しました。

続いて、技術センターの渡辺副所長が講師となり、これまでのノウサギ被害の状況や、新聞紙巻きや忌避テープ、針金とアルミ帯による防除対策など過去の取組について紹介しました。

また、国有林野事業での施業が間伐主体であった時期は造林地の減少に伴い、ノウサギ被害も減少していたが、今後の主伐・再造林の推進による被害拡大の懸念から、当センターでは平成29年度からノウサギ対策に関する「小型箱わなの開発、誘引餌の検討」、「GPS首輪やセンサーカメラを用いた行動分析」、「防護ネットの効果検証」など試験研究を進めていることを説明しました。



防護ネットの見学

現地では、アーカイブで紹介している小型箱わなや防護ネットの見学のほか、小型箱わなの作動実演や針金を用いたくくりわなの仕組みについて説明が行われました。参加者からは、誘引餌の種類や効果、国有林以外からの問合せ状況などについて質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。

最後に、主催者を代表して嶺北林業振興事務所の望月チーフ（増産担当）から「大変参考になる知見を得ることができた。参加者にはそれぞれの現場で活用していただきたい」との挨拶があり、勉強会は終了しました。

今回の勉強会は、「ノウサギ研究アーカイブ」を通じて、技術センターが蓄積してきたノウサギ対策に関する試験研究成果を地域の関係者と共有する貴重な機会となりました。

技術センターでは、今後も試験研究成果の普及と技術支援を通じて、再造林の推進と森林資源の循環利用に貢献してまいります。



小型箱わなの作動実演

ノウサギ研究アーカイブ

四国森林管理局
森林技術・支援センター

2026年ウッディフェスティバルに参加

〈香川森林管理事務所〉

9月19日、20日の2日間、高松市のサンメッセ香川において、香川県木材需要拡大協議会主催による「ウッディフェスティバル」が開催され、香川森林管理事務所から職員7名が参加しました。

ウッディフェスティバルは、香川県産木材の需要拡大を目的として昭和62年から開催されているイベントで、今年で37回目を迎えました。今年は「家から家具まで香川の樹」をテーマに開催され、会場規模の拡大により、昨年以上に多くの来場者で賑わいました。

会場には、香川県産材を使用した家具の展示をはじめ、木工体験や各種ワークショップ、企業・団体による展示ブース、マルシェなどが設けられ、来場者が木材や森林を身近に感じることのできる内容となっていました。また、各出展ブースを巡って体験やクイズに参加し、スタンプを集めるスタンプラリーも実施され、子どもから大人まで楽しみながら木材や森林について学ぶことのできる機会となっていました。



香川所　設営ブースの様子

当所のブースでは、国有林野事業の取組やOWL（森林内の立木を3Dレーザーで計測する機器）などの技術の紹介に加え、「四国の動物たち」「ドローン」「高性能林業機械」「架線集材」の4つをテーマとしたパネル展示や架線模型の展示（高知県森林技術センター提供）、当局の森林技術・支援センターや計画課などから提供いただいた動画を編集して放映しました。

また少しでも多くの方に展示物に興味を持っていただけるよう、各コーナーに香川所オリジナルスタンプ（職員で作成）を設置し、全てのスタンプを集めた来場者に対して、香川県産ヒノキを使用したコースターなど木製品を配布しました。さらに配布した木製品にスタンプを押したり絵を描いたりできる木工コーナーを設けたところ、多くの来場者に楽しんでいただき、木の温もりや香川県産材の魅力を身近に感じていただくことができました。



職員で作成した香川所オリジナルスタンプラリー

イベント期間中は、丸太切り競争や薪割り体験など、親子で木と触れ合える催しも数多く実施され、会場は終始活気に包まれていました。今回の出展を通じて、多くの方に森林の役割や林業の重要性について理解を深めていただく貴重な機会となりました。

今後もこのようなイベントへの参加を通じて、森林・林業や国有林野事業への理解促進に努めるとともに、多くの方に森林や木材への関心を持っていただけるよう取り組んでまいります。



木工スペースにあったうれしいメッセージ

労働災害の防止に向けて連絡協議会を開催

〈嶺北森林管理署・高知中部森林管理署〉

9月14日、高知中部森林管理署管内において、「令和8年度高知労働基準監督署、嶺北森林管理署及び高知中部森林管理署等合同連絡協議会」を開催しました。当日は、高知労働基準監督署から3名、林業・木材製造業労働災害防止協会から1名、森林整備センター高知水源林整備事務所から2名、嶺北森林管理署・高知中部森林管理署から15名の計21名が参加しました。

本協議会は、請負事業体の労働災害の防止や安全意識の向上、関係機関との連携による安全対策の強化などを目的として毎年開催しています。実際に現地を確認し、関係機関と意見交換を行うことで、より効果的な安全活動の推進につなげています。

まず、牧尾嶺北森林管理署長及び吉本高知労働基準監督署長の挨拶の後、林道工事現場及び治山工事現場において現場パトロールを実施しました。担当職員から事業概要や発注者としての安全指導事項について説明を行った後、参加者全員で現場における安全対策の実施状況を点検しながら、良好な取組や改善の余地がある事項について意見交換を行いました。参加機関からは、作業中の安全確保に万全を期するとともに、重機や作業員の転落防止措置を徹底すること、また、通勤災害の防止についても、安全を最優先とした取組の重要性について説明がありました。



林道工事現場点検の様子





治山工事現場の状況

現場パトロール終了後は高知中部森林管理署へ移動し、労働災害の発生状況、林業及び建設業における安全対策の推進状況並びに労働災害防止対策について、各機関から説明がありました。また、現場パトロールの点検結果に関する協議では、「法律や決まりを守ることはもちろん、どうすれば災害を防止できるかを考えることが重要である」との意見も出されました。参加者は、現場ごとに条件が異なる中で安全確保に万全を期すためには、基準を満たすだけではなく、それぞれの現場に応じた工夫を行い、日頃から安全管理を徹底することが重要であることを再認識しました。

最後に、森田高知中部森林管理署長から、「労働災害の防止は、発注者、受注者及び関係機関が一丸となって取り組むべき重要な課題であると考えている。今後とも皆様のご協力をいただきながら、労働災害の防止に取り組んでまいりたい」との挨拶があり、協議会を終了しました。

両署では、今後も関係機関と連携・協力しながら、労働災害の防止に取り組んでまいります。



意見交換会の様子

「高知の自然！大発見すごろく」を用いた森林教室を開催

〈嶺北森林管理署〉

9月25日、いの町森林政策課からの依頼を受け、遠足でいの町を訪れた日高村立日下小学校３年生29名を対象に、「グリーン・パークほどの」において、嶺北森林管理署から４名、四国森林管理局から４名の計８名が参加し、森林や自然のはたらきについての説明や「高知の自然！大発見すごろく」を用いた森林教室を行いました。

はじめに、「森林にはどのようなはたらきがあるか」「四国の森林に生息する生き物は？」などの森林に関するクイズを出題すると、児童たちは元気よく手を挙げて回答し、楽しみながら森林について学んでいました。

続いて、森林には、雨水を蓄えて洪水を防ぐはたらきや、土砂災害を防止するはたらき、二酸化炭素を吸収して地球温暖化の防止に貢献するはたらきなど、多くの役割があることを紹介しました。私たちの生活と森林との関わりについても説明し、森林が身近で大切な存在であることを伝えました。

さらに、森林管理署の仕事内容についても紹介しました。森林の機能を守るためには適切な管理が必要であることを伝え、国有林の森林整備、治山事業、森林保護など、森林を守り育てるために行っている業務について説明すると、児童たちは熱心に耳を傾けていました。

その後、高知県の特徴的な森林・自然や、森林に関する豆知識などが盛り込まれた「高知の自然！大発見すごろく」（嶺北森林管理署が作成）を用いて、楽しみながら高知の森林・自然について学び、「ここ行ったことあるよ」「ここに行ってみたい」などと友達や職員と交流しながら取り組んでいました。



班に分かれてすごろくをしている様子

最後に、いの町森林政策課による丸太切り体験も行われ、実際にのこぎりを使って丸太を切ることで、木の硬さや重さを体感し、木材を利用するまでの大変さや森林資源の大切さについて学んでいました。

今回の森林教室を通じて、児童たちに森林のはたらきや森林管理署の仕事内容を知ってもらうとともに、高知県の森林・自然について興味を持ってもらう良い機会となりました。

今後も管内小学校への森林教室やすごろくの普及活動を通じて、次世代を担う子どもたちに森林・自然や林業へ関心を持ってもらえるよう取り組んでまいります。



いの町森林政策課による丸太切り体験



林道維持の現場OJTを実施

〈嶺北森林管理署〉

10月21日、奥南川林道において林道維持に関する現場OJT（職場内研修）を実施しました。研修には若手職員8名が参加し、西山森林土木指導官をはじめとするベテラン職員4名の指導の下、林道維持管理の基本技術や留意点、林道走行時の安全運転について、実践的に学びました。

当署では、国有林林道の安全な通行を確保するため、「林道管理実施要領」に基づき日常的な維持管理を行っています。維持管理業務には、除草、小規模な崩土石の除去、側溝や溝渠の清掃、暗渠呑口の詰まり除去、路面排水施設の点検・補修、標識類の管理などがあり、林道機能を維持するうえで重要な役割を担っています。

今回のOJTでは、側溝や溝渠の清掃、暗渠呑口の土砂や落葉の除去を中心に実施しました。参加した若手職員は、クワやスコップを用いて堆積した土砂を取り除くとともに、グレーチング（格子状のふた）を取り外して清掃を行うなど、実際の維持管理作業を体験しました。普段は事務的な業務に携わることの多い職員にとって、林道施設の構造や機能を現場で学ぶ貴重な機会となりました。また、林道走行時における見通しの悪い箇所での徐行や路肩への注意など、安全運転に関する指導も行いました。



横断溝清掃の様子

作業中には、ベテラン職員から「以前は巡視の際に常にクワやスコップを車両に積み込み、異常を発見したらその場で対応していた」「小規模な崩土は人力で取り除き、安全な通行の確保に努めていた」など、自らの経験に基づく話も紹介されました。若手職員は、実際の作業を通じて維持管理に必要な着眼点や判断力について学び、技術や知識の継承を図る有意義な研修となりました。

参加した職員からは「普段は図面や資料でしか見ることのない施設構造を現場で確認することができ、維持管理の重要性を実感しました」といった感想が聞かれました。

また、側溝や暗渠が土砂で閉塞すると路面への雨水流入を招き、路面洗掘や路肩決壊の原因となることから、こうした日常的な維持管理が林道の長寿命化や安全な通行の確保につながることを確認しました。

林道は森林整備や災害対応の基盤となる重要な施設です。今後も現場OJTを通じて技術継承と人材育成を進めるとともに、適切な林道維持管理により安全で利用しやすい林道の確保に努めてまいります。

災害に備えた講習等を実施

〈高知中部森林管理署〉

近年、全国各地で大規模な自然災害が発生しているほか、これからの乾燥シーズンには山火事の発生リスクが高まることが予想されます。

高知中部森林管理署では、今後発生が予想される災害に備えた防災対策の一環として、9月29日の健康安全協議会に合わせて、職員10名を対象にジェットシューターの組立て・使用方法の講習を実施しました。また、南海トラフ地震などの大規模災害時には電力確保も重要な課題となることから、災害時に活用する資機材の取扱いについて理解を深めました。

ジェットシューターは、タンクに入れた水をノズルから噴射し、山火事が発生した場合の初期消火や延焼防止に使用する消防資機材です。背負って運搬できるため、車両が進入できない山林でも使用しやすく、電源やエンジンを必要としないことが特徴です。訓練では組立てから実際の放水まで一連の操作を体験し、操作のコツをつかむことで約10メートル先まで放水できることを確認しました。一方で、最大18リットルを収納する水タンクは重量があるため、扱う際の体力面や安全確保の重要性を実感しました。また、火災発生時には風向きや周囲の状況を的確に確認し、決して無理をせず安全第一で行動することの大切さを改めて再認識しました。



ジェットシューターの組立て状況



ジェットシューターでの放水状況

続いて発電機の試運転を行いました。発電機はガスを燃料とし、チェーンソーと同様にスターターロープを引いて始動します。実際に始動から電源供給までの流れを確認しました。これにより、災害時の停電対策として重要な資機材であることを改めて再認識しました。また、日頃から定期点検や試運転を実施し、いつでも使用できる状態を維持することの重要性についても理解を深めました。



試運転を行った発電機

今回の講習等を通じて、防災資機材の取扱い方法や災害時の対応について理解を深めることができました。今後も安全対策と災害への備えを徹底し、迅速かつ適切な対応ができるよう日々の業務に取り組んでまいります。

白髪山の山頂標識を交換

〈高知中部森林管理署〉

9月25日、白髪山（東熊山国有林38林班）の山頂において、職員6名により山頂標識の交換を行いました。

白髪山は高知県内に二座ありますが、香美市にある白髪山は、その美しい山容から「土佐富士」や「韮生富士」とも呼ばれています。中腹から上部にはなだらかな笹原が広がり、山頂からは三嶺をはじめ、天狗塚や剣山など四国を代表する山々を一望することができます。また、南側には石立山から安芸方面へと連なる山並みが広がり、四季折々の表情を見せる雄大な景観は多くの登山者を魅了しています。



山頂標識の交換風景

冬には雪化粧をまとった美しい姿が香長平野からも望まれ、四国百名山の一座として、地域の方々や県内外の登山愛好者に親しまれている山です。

さらに、白髪山は物部川の源流域に位置しており、山頂からは源流部から太平洋へと続く流域を見渡すことができます。源流から河口方向までの地形を一望できる山は全国的にも珍しく、白髪山ならではの大きな魅力となっています。

標高1,770メートルの山頂部は、冬季には積雪や強風にさらされるなど、厳しい自然環境にあります。長年にわたり登山者を迎えてきた山頂標識も、その風雪の影響により、今年の春先に破損していることが確認されました。

このため、登山者の皆様に引き続き親しまれる山であり続けるよう、職員が耐久性を考慮しながら手作りで新たな山頂標識を製作しました。秋の登山シーズンに合わせて設置を行い、このたび山頂のシンボルが新しく生まれ変わりました。



新しい標識


整備後の登山道

また、白髪山の登山道は笹が深く生い茂り、場所によっては足元が見えにくくなる区間がありますが、昨年から香南市在住の登山愛好家の方が休日を利用して笹の刈払いを続けています。「三嶺や白髪山をはじめとする三嶺山系の山歩きを楽しみながら、奥物部の豊かな自然を守りたい。安全で快適な登山環境づくりに貢献したい」という思いから活動を続けられており、その熱意には頭が下がる思いです。

この献身的な活動により、「歩きやすくなった」「安心して登山を楽しめる」といった声も多く寄せられています。当署としても、登山道の保全にご尽力いただいていることに対し、深く敬意を表するとともに、心から感謝申し上げます。

帰路はOJTを兼ねて、ベテラン職員から若手職員へ樹木の鑑定を交えて説明しながら下山しました。

これから白髪山周辺は紅葉の見頃を迎え、多くの登山者の来訪が見込まれます。リニューアルした山頂標識とともに、白髪山の雄大な自然や眺望を楽しんでいただき、安全第一で秋の山歩きを満喫していただければ幸いです。

「こうち木育ひろばinしまんとぴあ」に出展しました！

〈四万十森林管理署〉

9月27日、公益社団法人高知県森と緑の会が主催する「こうち木育ひろばinしまんとぴあ」が開催されました。本イベントは、緑の募金を活用した事業として、木や森と触れ合うことで豊かな心を育み、森や自然を大切にする人を育てる「木育」をテーマに行われました。

当日はしまんとぴあ（四万十市）1階の「りぐるホール」が会場となり、バードコールや木のリースづくり等、木に親しむワークショップが多数開催されました。また、イベント内に展示された木育に関する展示物の中から5つの3択問題が出題されるクイズラリーが行われました。

今回は目玉展示として、会場中央に木の玉プールや木馬等が設置され、無料で来場者が自由に遊ぶことができる「木のおもちゃひろば」があり、大勢の来場者が思い思いに楽しみました。



思い思いの木のおもちゃで遊びました！

四万十森林管理署からは、署長をはじめ4名が参加し、「森のはたらきについてのパネル展示」と「木のカスタネット作り」を出展しました。

パネル展示では、クイズラリーの1問として「なぜ間伐をするのか」について出題し、参加者は展示されたパネルを見ながら、解答を考えていました。



クイズに挑戦！「なんで間伐するのかな?」

木のカスタネットは、2枚の輪切りの木製の板にペンで思い思いに色を塗り、片方の板にはボンドで木片を取りつけ、太めのゴムで2枚を繋げることで自分だけのカスタネットを作るものです。小さいお子さん連れのご家族をはじめ100名を超える方々が訪れ、楽しみながらカスタネット作りに取り組みました。完成したカスタネットを見て、笑顔や「カスタネットづくりが楽しかった」との声をいただき、職員も笑顔あふれるイベントとなりました。



自分だけのカスタネットができました！

当署では、これからも森林とのふれあいを広げるイベントに積極的に参加し、森林に親しみ、魅力を発信する活動に取り組んでまいります。

第54回久万林業まつりに参加

〈愛媛森林管理署〉

10月17日・18日の2日にわたり、久万高原町における農林業の取組の発信や、農林業に対する理解を深めることを目的とする「第54回久万林業まつり」が開催されました。今年のテーマは「木になる。～見て、ふれて、感じる、久万高原町の一日～」で、秋晴れに恵まれた両日、会場には地元の森林組合や林業研究グループなど森林・林業関係団体のブースのほか、木育キャラバンの木のおもちゃ体験、地場産品の販売、飲食店等の出店があり、延べ15,800人を超える来場者が訪れ、幅広い世代に森林や木材の魅力を発信するイベントとして大いに盛り上がりました。



ブース受付に行列ができるほどの盛況

愛媛署は、実行委員会の一員としてイベントに参画し、「森林・林業に関するパネルの展示」及び「木工体験コーナー」のブースを出展しました。

受付では、美しの森国有林に指定されている石鎚風景林、滑床自然休養林等のクリアファイル、ポストカードを配布し、ブースの壁には森林の働きを紹介するパネルや森林保護員撮影の石鎚山の写真展示を行い、森林・林業、国有林野への理解を深めていただくためのＰＲを行いました。木工体験では、ペン立てとしても使える車、スマホスタンド、松ぼっくりのクリスマス飾り等、様々な木工品の組立てキットを取り揃え、小さなお子様連れのご家族からシニア層の方まで幅広い年代の方が訪れ、2日間で500名を超える方々に参加いただきました。

今年は、受付時に参加者一人ひとりへ木工皿を貸出し、無料配布の木片を手にしやすくなる工夫をしたところ、多くの方が木片を使った飾りつけを行い、思い思いのオリジナル作品を仕上げていました。中には2時間以上集中して大作を作り上げた親子もおり、出来上がった作品を大事そうに抱えながら「たくさんの木片を使って飾り付けが出来て、本当に楽しかった」と満面の笑みを見せてくれました。



木工体験の様子



オリジナリティーあふれる作品たち



天空の笹原「土佐矢筈山」周辺で山歩きイベント開催

〈高知中部森林管理署〉

9月19日、高知県香美市主催（運営：NPO法人いなかみ）のイベント「かみめぐり」のプログラムで「初秋の土佐矢筈山（やはずやま）で香美市の森林について学ぼう」が開催され、県内外から一般参加者13名に加え、登山時の案内や安全指導等のサポートスタッフとして、かみめぐり事務局から1名及び高知中部森林管理署から職員5名の計19名で山頂を目指しました。

土佐矢筈山（1,607m）は高知中部森林管理署が管理する国有林内に位置し、風景林にも指定されています。登山口は香美市物部町笹の「矢筈峠（アリラン峠）」にあり、当日は、前日まで降り続いていた雨が嘘のようにぴたりと止み、絶好の登山日和となりました。

奥物部ふれあいプラザから車で約1時間、土佐矢筈山登山口に到着し、準備体操・ダニ対策をしっかり行って登山を開始しました。登山道付近で最初に出会った植物はサルナシでした。山地に生える、ツツジ目マタタビ科マタタビ属のつる植物で、8月から10月の間に小さな甘い実をつけます。実を口に運んだ方々は、「美味しい！」と笑顔を見せたり、予想以上の酸っぱさについ顔をしかめたりと十人十色の反応をしていました。

登山開始後は、山の現状や自生する植物について触れながらゆっくりと山頂を目指しました。ニホンジカに樹皮を剝がされたリョウブの木の根を見て、「こんなところまで食べるなんて」と、驚きと木々を心配する声があがっていました。しかし、森下森林技術指導官の「リョウブは枯れにくい」「リョウブはジョウブ（丈夫）！」という言葉に思わず笑みがこぼれ、「リョウブは丈夫！」と口ずさみながら歩を進めました。

急な登りを超えると、頭上を覆っていた木々が徐々になくなり、眼前には笹原と香美市の誇る山々が広がりました。緩やかな稜線を歩いて、ようやく山頂に辿り着くことができました。眼下に広がる雄大な景色に参加者の皆様からは「向こうの山にも行ってみたい、どんな景色が見えるだろう」、「この景色を見ることができてよかった」と心



山頂の様子



山頂で集合写真

からの嬉しいお声をいただくことができました。

下山後、当署の東野次長から「五感で楽しむ」という言葉を用いた閉会挨拶がありましたが、今回の登山では視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚全てで自然を感じながら登山を楽しんでいただく機会となり、今後も山の現状を知っていただくとともに、山に触れ、自然に触れる楽しさを知っていただきたいと考えています。

参加者のアンケートの中で、「自然そのものを感じられた」、「来年もまた登りたい」という嬉しい感想をいただけるとともに、「シカの食害対策を詳しく知りたい」等のご意見もいただきました。いただいた感想やご意見を今後の活動に活かしてまいります。

当署では引き続き、森林の保全管理に取り組み、より多くの方々に森林の魅力にふれていただけるよう活動を続けていきます。



下山時の様子

「みやびの森」秋のボランティア活動開催

〈高知中部森林管理署〉

10月3日、ブナやミズナラの天然林が広がる別府山国有林51林班（通称「みやびの森」）において、高知中部森林管理署と三嶺の森をまもるみんなの会が主催する「秋のボランティア活動」を開催しました。

高知県と徳島県にまたがる剣山系の三嶺周辺では、2003年（平成15年）頃からニホンジカによる食害が深刻化し、笹や下層植生の衰退、樹木の枯死など、自然環境の悪化が進んでいます。

こうした状況を受け、高知中部森林管理署と三嶺の森をまもるみんなの会では20年前から、シカの食害から森を守るため、防護ネットの設置をはじめとした保全活動に取り組んできました。今回もプレスリリース等を通じて広くボランティアの参加を呼びかけたところ、一般参加者78名の応募があり、当署10名、四国森林管理局7名、三嶺の森をまもるみんなの会11名を合わせた100名を超える規模での開催となりました。

対象区域への防護ネット設置作業は昨年度から計画されていましたが、雨天による中止が続き、今回ようやく4度目の正直で実施することができました。当日は絶好の秋晴れに恵まれ、久しぶりに顔を合わせる参加者や初参加の方々で登山口となる白髪山駐車場は満杯となり、大いににぎわいました。

開会式では、当署の森田署長が森林環境保全の意義と参加者への感謝を述べた後、三嶺の森をまもるみんなの会事務局から作業内容等について説明が行われました。その後、参加者は7班に分かれて出発し、色づき始めた天然林の尾根道を約1時間歩いて作業場所へ向かいました。

作業では各班のリーダーを中心に、後継者育成も見据えながら、防護ネットの設置方法などを丁寧に指導されました。参加者同士が和やかに交流を深める一方で、支柱を立ててネットを張る場面では真剣な表情で作業に取り組む姿が見られました。

最年少で参加した香美市の小学1年生の児童も、ハンマーを手にネットを止める杭を力いっぱい打ち込み、作業に積極的に取り組んでいました。

穏やかなブナ林の中での活動に、参加者からは「こんな素晴らしい森があるとは知らなかった」「とても気持ちのよい森だ」といった声が多く聞かれ、「みやびの森」の魅力に触れる機会となったようです。

また、参加者は長年活動を支えてきたベテランから大学生や小学生まで幅広い世代にわたり、世代を繋いで森を守る活動が受け継がれていく可能性を感じる一日となりました。



ロープの結び方を伝授



秋晴れの中でネット設置

閉会式では、四国森林管理局の近藤森林整備部長から参加者へ労いの言葉が贈られ、改めて森林を守ることの大切さが共有されました。続いて三嶺の森をまもるみんなの会の石川代表が活動を総括し、今後の継続的な協力を呼びかけた後、全日程を終了しました。

今回の活動により、新たな防護ネットの設置によって保護範囲が拡大するとともに、好天にも恵まれ、参加者の皆さまが充実した一日を過ごしていただけたのではないかと思います。本活動が、森林環境の保全や豊かな森への関心を深めるきっかけとなれば幸いです。

当署では、今後も「みやびの森」をはじめとする管内森林の保全管理に取り組み、ボランティア団体の皆さまと協力しながら、かけがえのない自然を守り育ててまいります。

大豊学園で治山事業を学ぶ環境学習教育を実施

〈嶺北森林管理署〉

10月13日、大豊学園の5・6年生26名を対象に、治山事業を通じた環境学習教育の出前授業を実施しました。

この取組は、昭和39年度から高知県長岡郡大豊町で実施してきた「南小川地区直轄地すべり防止事業」が本年度をもって完了を迎えることから、地域への情報発信の一環として行ったものです。将来の地域を担う子どもたちに、森林の働きや治山事業の役割を知ってもらい、自分たちの暮らしとのつながりについて理解を深めてもらうことを目的としました。

授業では、まず「森林のはたらき～降った雨はどうなるの？～」をテーマに、森林が持つさまざまな機能について学習しました。森林は雨水を土の中に蓄え、洪水を防いだり、水をきれいにしたりするほか、土砂災害の防止にも大きな役割を果たしています。土壌浸透実験では、森林の土とはげ山の土を比較しながら雨水の浸透状況を観察しました。児童たちは実際にじょうろで水をかけ、森林の土が多くの水を蓄える一方で、はげ山では水が地表を流れやすいことを目の当たりにしました。会場からは「土砂崩れだ！」「家が流されている！」といった驚きの声が上がりました。



森林のはたらきについての学習の様子

続いて、「みんなを守る山づくり～治山のしくみと役割～」と題し、治山事業について学習しました。大豊学園の上流域で実施されている南小川地区の事業を紹介しながら、治山ダム工やアンカー工、集水井工（しゅうすいせいこう）などの地すべり対策施設の役割について説明しました。また、模型を用いた土石流実験の映像を見て、治山ダムの有無による被害の違いを比較し、治山施設が地域の安全・安心な暮らしを支えていることを学びました。治山ダムがない場合には下流の家屋が被害を受ける様子が映し出され、児童たちは治山ダムの重要性を実感していました。



模型を用いた土石流実験の様子

授業後には、「土石流や地すべりが起きないように、いろいろな工事をしていることがすごい」「治山工事をしなかったら家や人に影響が出るので、治山工事はとても大切なんだと思いました」「固い土は水がしみ込みにくいと聞いて、運動場によく水たまりができる理由も分かりました」などの感想が出され、森林の機能や治山事業への関心を深めてもらう機会となりました。

当署では、今後も森林環境教育や普及啓発活動を通じて、地域の皆さまに森林の働きや治山事業の重要性について理解を深めていただけるよう取り組んでまいります。



津野町内の2小学校合同で木工教室を開催

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

○概要

9月10日に津野町芳生野（よしうの）の津野町立中央小学校で、葉山小学校と中央小学校の5年生計27名を対象とした木工教室を開催しました。

この教室は、毎年津野町教育委員会が実施している2校合同自然体験型合宿（幡多青少年の家）が台風の影響で中止となったため、その代替として「ものづくりの楽しさや木に触れる心地よさを体験し、森の恵みに感謝する心を育てたい。」との依頼を受け実施したものです。

○実施内容

はじめに、「木材の特徴」をテーマに座学を行い、木材の環境材料としての優れた特性について説明しました。

スライドに沿って、「皆さんの身の回りで木が使われているものはどんなものがありますか？」と質問すると、「ノート、タンス、家の柱など」と元気に手を挙げて答えてくれました。森林は木材を生み出すだけでなく、水を育み、空気をきれいにするなど、私たちの生活に欠かせないはたらきをしていることを学んでもらいました。

また、世界一硬く重い木リグナムバイタ、世界一柔らかく軽い木バルサ、集成材、CLT（直交集成材）などの木材のサンプルを用意し、重さや手触りの違いを体感してもらいました。

さらに、木材ごとの重さを比較する実験や、木目の向きによる強度の違いを確かめる実験も実施。ヒノキ材を使った実験では、木目に沿って簡単に割れたる一方、木目に直角方向には割れないことを体験し、木材の性質について理解を深めました。

続いてお楽しみの木工クラフトづくりを行いました。山・川・海でつながる生き物の姿をキリ材やヒノキ材で作った魚や水生動物、昆虫等のパーツにポスターカラー等で色を塗り、スギやヒノキの板に自由に配置して貼り付ける壁掛け作品作りに挑戦しました。



木工クラフト作りの様子

また、今年の津野町制20周年を機に誕生した公式マスコットキャラクター「ちゃつのん（四国カルストの夜空から生まれた雲海の赤ちゃん）」について、町の許可を得て木工パーツとして制作し、作品づくりに活用しました。

そのほか、貝殻や小枝（津野町不入山（いらずやま）の四万十川源流域の国有林に有るクロモジ、ウツギなどを使用）、自然素材やフェルト等を使って装飾し、最後にカラーヒモやリボンを取り付けて完成。それぞれの個性が光る壁掛け作品が出来上がりました。



作品できたよ（完成した「ちゃつのん」の壁掛けなど）

○おわりに

児童の代表から「森林（もり）の大切さや木材の特徴がよく分かりました。今後も山・川・海の身近な自然を大切にしていきたいです。木工クラフト作りが楽しかったです。ありがとうございました。」と感謝の言葉が述べられました。

今回の木工教室を通じて、森林や木材をより身近に感じ、その大切さへの理解を深めてもらえたのではないかと考えます。



実験等を通して感じたことや考えを発表する児童

当センターでは、今後も教育委員会など教育機関の要請に応え、児童・生徒を対象とした森林環境教育への支援活動を推進していきます。

業務研修を受講して（基礎C_森林の収穫）

徳島森林管理署　祖谷川第一治山事業所　林田　健太郎

9月28日から10月2日にかけて、四国森林管理局で開催された「一般業務研修・基礎C」を受講しました。本研修は、素材生産請負事業や立木販売事業等に深く関係する「架線集材」及び「収穫調査」の基礎的な知識と技術の習得を目的として実施されたものです。受講生は入庁1～3年目の若手職員が中心で、日常業務でこれらの事業に携わらない職員も多く参加しており、治山事業を担当する私にとっても、新たに学ぶことが多い大変貴重な機会となりました。



模型（ミニ電動集材機）の操作体験

研修前半（9月28日～29日）は、「架線集材」について学びました。架線集材とは、ワイヤロープを用いて木材を吊り上げて搬送する集材方法です。座学に加え、模型（ミニ電動集材機）の操作体験や実際の現場見学を行ったことで、架線システムへの理解をより深めることができました。また、架線集材における労働災害の事例や防止対策についても学びました。四国管内の治山事業においても、架線による資材搬入が行われている現場は少なくないことから、今回得た知識を現場の安全管理に活かしていきたいと感じました。

研修後半（9月30日～10月2日）は、立木の材積把握のために実施される「収穫調査」について、実習を通じて学びました。現地踏査時の林班図の見方や、林尺・コンベックス等を用いた従来の収穫調査手法を学ぶとともに、地上型3Dレーザー「OWL」を活用した収穫調査も体験しました。「OWL」は地上に設置してボタン一つで森林計測が可能であり、調査結果等を整理した書類（復命書）の作成支援機能も備えていることから、収穫調査の省力化・効率化に有効な機器であると実感しました。一方で、下層植生が繁茂する場所では事前の刈払いが必要となることや、急傾斜地では持ち運びが困難であることなどの課題も把握することができました。今回の体験を通じて、OWLをはじめとするICT機器を効果的に活用するためには、現場条件が機器の使用に適しているかを見極めることが重要であり、そのためには実際に機器に触れ、仕様や特性を理解しておく必要があることを学びました。



地上型3Dレーザを活用した収穫調査の様子

研修最終日には、徳留計画保全部長による講話があり、公務員としての心得について学びました。「情報はオープンにすること」「資料の整理整頓」といったお話を通じて、無意識のうちに情報を抱え込んだり、資料整理を後回しにしたりしていた自身の姿勢を見直すきっかけとなりました。今後は、自らの考え方の偏りを意識しながら、情報共有や資料整理に積極的に取り組んでいきたいと思います。また、過去の官製談合事件に関するお話も非常に印象深く、治山事業に携わる公務員として、法令遵守を徹底することの重要性を改めて認識しました。

今回の研修は、架線集材や収穫調査に関する理解を深めるだけでなく、日々の業務に直結する知識や心構えを学ぶことができた大変有意義なものでした。また、四国森林管理局において導入が進められているICT機器についても知見を深めることができ、今後の活用方法に対する関心も高まりました。今回得た知識や経験を今後の業務に活かすとともに、自身の担当分野以外についても積極的に情報収集を行い、視野を広げていきたいと思います。



収穫調査実習地での集合写真

防護柵の設置と管理をより効率的におこなうためには?

森林総合研究所四国支所　森林生態系変動研究グループ　米田令仁

ニホンジカ（以下「シカ」）の生息密度が高いとされている地域では植栽木を食害から守るために防護柵が使われています。しかし、防護柵が設置されても十分に管理されていない場合、防護柵が破損したまま放置されると柵内にシカが侵入することで植栽木に被害が発生します。定期的に防護柵を点検し破損した場所を修繕することで、植栽地へのシカの侵入を防ぐことができることから（大谷と米田, 2023）、設置した防護柵がきちんと機能するためには点検と修繕が重要と言えます。また、各地で防護柵が破損しないための様々な工夫がされていますが、このような工夫に関する情報が共有されていないことから、依然として設置に問題がある防護柵を多く見ることがあります（写真）。

森林総合研究所が令和６年度から取り組んでいる林野庁事業「高度な森林鳥獣被害防除手法の標準化推進事業（主査：岡輝樹）」では、防護柵の設置、維持管理に関する手順書を作成しています。手順書では、破損しにくい防護柵の設置の方法、設置の際に気をつけなければいけない点、柵の修繕方法を示します。本事業では防護柵の点検項目を統一することが重要と考え、FenCI（Fence Condition Inspection & Management Form）という入力フォームを作成しました。また、シカが多いことにより被害を受ける可能性が高い場所を明らかにするために、シカの痕跡をスコアー化した DISco（Deer Impact Score）（山川ら2023）を用いることを推奨しています。DISco調査は時間と手間がかからず、植物の同定作業がないため誰でも簡単にできる方法として推奨しています。これらDISCoとFenCIについて、スマートフォンを使った入力フォームを制作しております（図）。スマートフォンは日時、位置情報を記録することができ、写真も撮ることができます。スマートフォンで記録したデータをパソコンに取り込み、GISのソフトで編集できるようにしています。これらDISCoとFenCIのデータを蓄積することで、どの地区でシカの痕跡が多いのか、どのような場所で柵が壊れやすいのかということがわかるようになります。これらのデータを活かすことで、より破損しにくい防護柵の設置方法を開発できることが期待されます。本事業に関心のある方は森林総合研究所四国支所にお問い合わせください。

参考文献

大谷と米田（2023）森林防疫72(2):11-20. 山川ら（2023）森林総合研究所研究報告22(4):209-215.



写真）作業道沿いに設置された防護柵. スカートネットもしくはL字張りにできなかったことから下から潜り侵入されていました。



（図）イメージ図（Google Geminiで作成）